

栄光学園創立者による自筆メモの分析と考察 Analysis and Evaluation of Written Memos by the Founder of Eiko Gakuen

－ 情報分類とXMLによるタグ付けのプロセス －

－ Information classification and tagging process through XML －

大野 邦夫[†]

Kunio Ohno[†]

[†]株式会社 モナビIT コンサルティング

[†] Monavis IT Consulting Co., LTD

[†] E-mail: k-ohno@star.ocn.ne.jp

1. はじめに

本報告は、個人のメモのような非公式、非定型な文書の電子化ならびにアーカイブとして管理する手法に関するものである。第2回DMH研究会において、東京大学の宇野瑞木先生による一高における中国人留学生の活動を総括した藤本文書に関する報告があったが[1]、本報告もそれに類似の内容として位置づけられる。ここでは栄光学園の創立者であるグスタフ・フォス校長の個人的なメモを対象に、その電子化と今後の管理のための手法についての検討経緯を紹介する。

栄光学園同窓会には、アーカイブ管理のチームが設けられ、私もその一員としてお手伝いしている。2018年から翌年にかけて、栄光学園に勤務されていた先生方やクラブ活動関係の書類や品物を整理する機会があった。その際に、栄光学園創立者のグスタフ・フォス校長の自筆のメモを発見し、貴重な文書として保管されることになった。この文書を保管するとは言っても、フォス校長を知っている人物がその内容を把握しておく必要があると思い、同窓会のアーカイブチーム責任者に、フォス校長の自筆メモの解説を申し出た。しかしながら、コロナが蔓延したことによりそのような活動が停止された。今年の3月になってようやく解除され代表的な一冊をデジタルカメラで撮影し、その内容を解説したので主にその手法に関して以下紹介する。

2. 自筆メモの概要

フォス校長の自筆メモは、特に整理された構成ではなく、随筆風の手書きの記録と英文タイプ、製版印刷、新聞記事等の切り抜き、雑誌記事のコピーなどで構成されていたが、どちらかと言うとランダムに配置され、意味的な順序付けはなされていないと思われた。作成日時や新聞記事などの日付も殆どが不明であったが、概略以下のような構成になっていた。

- (1) 手書き (9ページ)
- (2) 英文タイプ・印刷 (3.5ページ)
- (3) 和文印刷 (1.5ページ)
- (4) 記事切り貼り (6ページ)
- (5) 雑誌記事コピー (21ページ)

自筆の記録は、英語、ドイツ語、ローマ字、日本語によるものであったが、大半はローマ字であった。思考内容が日本の教育や政治、習慣、文化に関わることが多いので、英語やドイツ語に訳して記述するよりは、そのまま日本語の話し言葉で記述したものと思われる。英文タイプに関しては、英語のみならず、かなりの部分がローマ字で記述されていた。

3. DTPシステム活用とXMLによるタグ付け

3.1 DTPシステムの活用

取り敢えず、GUIを活用できるDTPシステムにデータを一通り入力することにした。DTPシステムとしては古い製品であるが、Interleaf6を用いた。Interleaf6は、米国Interleaf社が1984に出荷したTPS (Technical Publishing System) の後継製品である。1992年に最初の日本語版であるInterleaf5がUnixアプリケーションとして出荷され、1997年に後継製品のInterleaf6が、Windows版で出荷された[2]。今回使用したのは、Windows10上で稼働するInterleaf6を用いている。

デジカメで撮影した画像を、フレームとして管理し、それを目視でキーボード入力した。文字入力に当たり、Interleaf6のComponent機能を活用してイメージ、フォス校長の文章、和訳、その他の4種類に分類した。

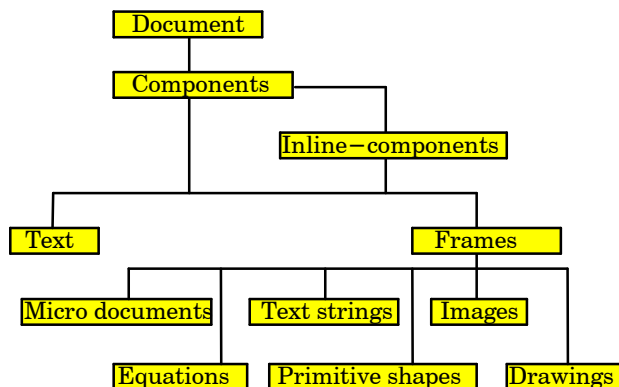


図1 Interleaf6文書の論理構造

Interleaf6の論理構造を図1に示す。DTP文書構造のトップレベルは、Documentであり、それは縦列構造のComponentにより構成される。個々のComponentは、TextとFrameで構成され、Textに関しては、図2に示すように文字サイズ、フォント、上付き・下付き、色、アンダーライン等の文字属性、文字間隔・行間隔、目次項目、タブ等のプロパティを持ち、柔軟な文字列レイアウト構成を可能とする。Frameは主に図形、画像、数式表現に使用されるが、Micro documentという、Componentの再帰的組込を可能にしている。Inline-componentは、行間への情報挿入機能で、ルビや注に用いられる。



図2 Componentの属性シート

3.2 文字コード化

デジタルカメラで撮影した画像を目視で判読し、キーボード入力して文字コード化した。資料が大量に存在する場合は、OCRを使用するのが一般的であるが、今回はそれほどの量ではないので目視で判読し入力した。

3.2.1 手書き

解読し、そのまま入力した。そのためにその殆どは欧文であるが、稀に日本語が存在する。フォス校長のオリジナル情報は、「フォス」という名称のComponentとし、青色の文字として識別した。フォス校長の筆記書体は独特なので、おそらくOCRによる判読は困難と思われた。訳文は「和訳」という名称のComponentで記述し、赤色の文字で識別した。

3.2.2 英文タイプ・印刷

そのままタイピング入力し、手書きの場合と同様に「フォス」という名称のComponentで管理した。

3.2.3 和文印刷

そのままタイピング入力し「本文」という名称のComponentで管理した。

3.2.4 記事切り貼り

記事は、そのままタイピング入力し「本文」という名称のComponentで管理した。手書きのコメントは、「フォス」Componentとして入力した。

3.2.5 雑誌記事コピー

そのまま入力するのは煩雑なので、タイトルを引用し、パラグラフごとに要約して「本文」Componentに入力した。なお出典は、Voice May, 1984のみ判明している（8ページ分）。

3.3 分類の詳細化

フォス校長による記述は、全て「フォス」という名称のComponentで管理したが、その内容は、英語、ドイツ語、ローマ字、日本語、英文タイプ・印刷といったカテゴリが存在する。さらに「本文」というComponentで管理した情報には、記事の切り貼り、記事の要約、和文印刷があり、以上を区分したいと考えた。

そこで思いついたのは、個々の情報毎にタグを付けることである。タグ付けの標準的な手法はXMLなので、XML文法[3]に基づき開始タグと終了タグを付加した。

3.4 文書型定義

以上述べた分類意外に、編集の便を考え、メモ、注釈、コメントを追加した。以上の構成を、文書型定義（DTD: Document Type Definition）[4]で記述すると、以下のようになる。

```
<!DOCTYPE フォス校長メモ [
  <!ELEMENT フォス校長メモ (image+, head*, 英文タイプ*, 和文タイプ*, 手書き*, 記事*, 記事要約*, メモ*, 注釈*)>
  <!ELEMENT image (注釈*, コメント*)>
  <!ATTLIST image file REQUIRED>
  <!ELEMENT head (#PCDATA)>
  <!ELEMENT 手書き (ローマ字*, 英語*, ドイツ語*, 日本語*, 和訳*, 注釈*, コメント*)>
  <!ELEMENT 英文タイプ (ローマ字*, 英語*, ドイツ語*, 和訳*, 注釈*, コメント*)>
  <!ELEMENT 和文タイプ (#PCDATA)>
  <!ELEMENT ローマ字 (#PCDATA)>
  <!ELEMENT 英語 (#PCDATA)>
  <!ELEMENT ドイツ語 (#PCDATA)>
  <!ELEMENT 日本語 (#PCDATA)>
  <!ELEMENT 和訳 (#PCDATA)>
  <!ELEMENT 記事 (本文*, 注釈*, コメント*)>
  <!ELEMENT 記事要約 (本文*, 注釈*, コメント*)>
  <!ELEMENT 本文 (#PCDATA)>
  <!ELEMENT メモ (#PCDATA)>
  <!ELEMENT 注釈 (#PCDATA)>
  <!ELEMENT コメント (#PCDATA)>
]
```

以上は、XML処理系で処理するためではなく、タグの体系的な管理のためのメモのようなものである。

3.5 語彙の出現頻度

画像データを文字コード化した後に、語彙の出現頻度を調べてみた。その結果下記のようなデータが得られた。

3.5.1 20回以上出現した語彙

教育 (84), 教師 (62), 先生 (54), 人間 (54), 生徒 (48), 学校 (38), 考え (29), 必要 (22), 道德 (21), 指導 (21)

3.5.2 10～19回の出現語彙

仕事・知識・親 (16), 主義 (15), 社会・教科・大学 (11), 教員・養成・善・基本・良い (10)

3.5.3 5～9回の出現語彙

国家・勉強・学習・校長 (9), 聖職・宗教・人生・科目・研究 (7), 目的・労働・家庭・条件・思想・日本・態度・教授・努力 (6), 組合・理想・現実・教職・精神・知育・時代・戦後・自主・能力・進学・計画・個人 (5)

3.6 フォス校長の人間像

語彙の頻度から、フォス校長の価値観を推察することが可能である。基本的な分野は、教育である。20回以上出現した語彙を眺めてみると、教育 (84), 教師 (62), 先生 (54) の例からそれは明白である。次に考えられるのは、宗教家・聖職者としての価値観である。これは、道德 (21), 親 (16), 善 (10) の例から知ることができる。さらに語彙を考えてみると、自由な思想家、異文化交流者としての人間

像を感じさせられる。敗戦で荒廃した異国の青少年を育成するという容易ならざる任務を实践した人物像から、教育者、宗教家、思想家、異文化交流者としてのユニークな人柄を感じることが出来る。

4. フォス校長の生涯の把握

自筆メモの分析のためには、フォス校長の生涯を把握する必要がある。フォス校長に関しては、「日本の父へ」[5]と「日本の父へ再び」[6]という著書があり、それらはフォス校長本人の記述を通じてその思想と人となりを紹介されている。「日本の父へ再び」の著者紹介には次のように記されている。

『1912年、ドイツのドルトムント市に生まれる。1933年、来日、日本語・東洋史・哲学をを研修。1939年、アメリカに留学、歴史学・神学を研修、1942年、カトリック司祭として叙階。1946年、カリフォルニア大学大学院（東洋言語学）を卒業し、再来日。上智大学教授を経て、1947年、栄光学園校長に就任（1977年辞任）。1956年、同学園理事長』

その後、5月に栄光学園同窓会主催で、フォス校長の特別展が開催され、その中に自筆文書の紹介が行われて、私が作成したXMLによりタグ付けされたデータも印刷して展示された。その際に経歴と「私の生いたち」（1977年）というパネルが展示され、その生涯の概要を把握することができた。その生涯をマトリックス履歴書を使用して図3にまとめた。

1912～	1922～	1932～	1939～	1946～	1964～	1977～1990
幼少期 年齢 0～9	少年期 10～19	日本滞在 20～26	米国滞在 26～33	再来日・栄光設立 33～51	大船時代 51～64	リタイア後の活動 64～77
鍛冶屋の家庭で誕生 父は炭鉱夫へ転職 ギムナジウムへ	家庭の重視 父への尊敬	青少年への貢献意識 教育への興味	東洋の若者への関心	父の思想を生かす	父の薫陶経験を執筆	責任感と自立の重視
	理科系の中学へ 父からの自立勧告 父の仕事を手伝う	科学的な視点 ナチス批判	米国文化の習得	日本人の甘えを批判 労働奉仕精神 栄光ヒュッテ建設 規律と従順を重視 戦前の日本を評価	教育思想・経験を執筆	受験の甘えを批判
		イエズス会へ入会 来日し滞在	日本社会への関心	米国文化への批判 キリスト教教育 日本語習得を生かす	日本の教育界の評価	立身出世主義の批判
			渡米し神学歴史学を 修得し神父になる 東洋言語学で学位	上智大学教授 栄光学園(田浦)設立 東大入学者増大	右寄り文化人の評価	設立時の経緯を執筆
					受験有名校へ	
					大船へ移転 県知事表彰 「日本の父へ」執筆	再度の執筆
						文部省視学委員 「日本の父へ再び」 燭天(1990)

図3 フォス校長のマトリックス履歴書

マトリックス履歴書は、以前福島高専で被災地における女性起業家の育成の研究の際に考案した人物像を把握するための二次元の表形式の履歴書である[7]。全体の期間を特徴ある期間ごとに区分し、個別の区間の相互に関係する記述を行と列に対応する矩形スペースに書き込んで、全体像を把握する履歴書である。以前福沢諭吉、津田梅子、石井筆子などの教育起業家について分析したことがあり[8]、教育起業家に相応しいフォス校長に関しても適用を試みた。

この内容から、家庭生活における父親からの熱い薫陶、若い人々への貢献を目指してカトリックの神父になる決意

をしたこと、神父になって来日し、大学教授になる予定が中学の校長を命じられて困惑した場面、そのような困難な状況で尽力し、栄光学園を有名校にした経緯が把握できた。

5. 自筆メモから思い当たること

自筆メモ内容の詳細な分析は検討途上であるが、ざっと拝読して思い当たることが二つあった。一つは、盆栽育成的な教育についてである。著書の「日本の父へ再び」の「1. 立身出世の功罪」中に、「点取り親がつくるボンサイ」という項目がある[9]。自筆メモにそれを思いついた発端らし

き記述が存在する。その個所をXML化した自筆メモから引用する。

<ローマ字>Keizai Doyu-kai</ローマ字>

<和訳>経済同友会</和訳>

<ローマ字>Eiko --- Bonsai = Zukuri</ローマ字>

<和訳>栄光 --- 盆栽=造り</和訳>

<ローマ字>→ Gakureki hencho → Chishiki yu-sen → Seiseki no tame </ローマ字>

<和訳>→学歴偏重→知識優先→成績のため</和訳>

親が子供に強制する受験勉強を「盆栽造り」に譬えているが、フォス校長は受験教育には反対する立場であったことが分かる。もう一箇所思い当たる興味深い記述は、パスカルの「人間は考える葦」に関するものである。

<英語>Man is a thinking reed (Pascal)</英語>

<和訳>人間は考える葦である (パスカル) </和訳>

<ローマ字>Kangaeru koto no dekiru ashi (numani ippai haete iru)</ローマ字>

<和訳>考えることのできる葦 (沼にいっぱい生えている) </和訳>

<ローマ字>Kaze ni hidoku yureru yowayowasii kusa</ローマ字>

<和訳>風にひどく揺れる弱々しい草</和訳>

この記述が、1964年に卒業した私ども12期生への卒業アルバムのフォス校長のメッセージ(図4)を思い出させてくれた。

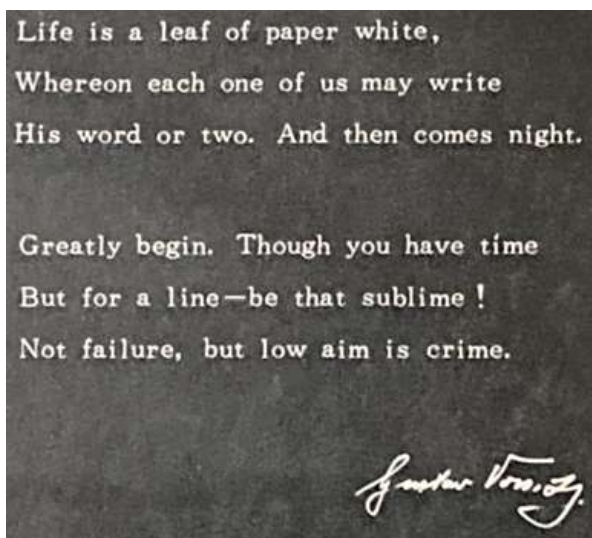


図4 12期生卒業アルバムへのメッセージ

先に3.2.1項で、Interleaf6画面のフォス校長記述のComponentを青字で、和訳のComponentを赤字で示したと書いたが、引用個所を認識しやすいように色分けして記述した。なお赤字では目立ちすぎるので紫色にした。GUI操作に優れるInterleaf6のような高機能DTPシステムは、コンテンツ制作やそれを通じた分析・評価などにおいてテキストエディタやWeb構築ツールに比べ現在でも有効である[10]。

6. まとめ及び考察

公表を想定していない私的なメモの解説、分析は困難を伴うが、公的に知られている人物像をより正確に把握し評価するためには有効な情報である。今回の検討内容と新た

に判明したこと等を要約すると、

(1) 紙資料アーカイブの情報収集にはデジタルカメラを使用し、それを元に判読・分類した。

(2) フォス校長の自筆メモ冊子を、手書き、英文タイプ・印刷、和文印刷、記事切り貼り、雑誌記事コピーに分類した。

(3) 原始的な分類には、Interleaf6のComponentを色分けして活用した。

(4) 詳細分類は、XMLによるタグ付けを行った。

(5) タグ付けされたデータを対象に語彙分布分析を行い、フォス校長の活動を、教育者、宗教家、思想家、異文化交流者として位置づけた。

(6) フォス校長の経歴、著書等からマトリックス履歴書を制作し、その生涯を把握した。

(7) 自筆メモから思い当たるエピソードがあり、それについて紹介した。

(8) GUI操作に優れる複合文書によるDTPシステムは、コンテンツ制作・分析・評価において、現在でも有効である。

自筆メモの大半がローマ字であったことは、外国人の日本語理解のあり方の興味深い事例を示唆する。語彙頻度の分析から、フォスさんは何者であったかを考察し、教育者、宗教家、思想家、異文化交流者と感じた。

7. おわりに

今回の検討では、自筆メモの分類法、文字コード化とXMLによるタグ付けのプロセスを中心に紹介した。自筆メモ内容に関しては、XML化された情報を活用して、今後さらに検討を続けたいと考えている。

今回の検討は、栄光学園同窓会アーカイブチームの責任者である青木嘉光様の活動無しには不可能でした。またドイツ語文章の翻訳に関しては東洋大学の市田節子先生のご協力を頂きました。ご両名の協力に感謝します。さらに内容全般に関して、私と同期の栄光学園OBの桂勲様をはじめとする高度技術者育成と技能伝承研究会(高承研)で事前に議論して頂きました。参加頂いた皆様に御礼申し上げます。

文献

- [1] 宇野瑞木, “一高における中国人留学生受け入れの歴史: 個人情報を含む新出資料の整理・調査・公開に向けて”, 画像電子学会第2回デジタルミュージアム・人文学(DMH)研究会, Sep.2021 (2021.9)
- [2] 大石進, “Inside Software: オーバービューオブInterleaf5 Part1”, スーパーアスキー, Vol.3, No. 10, pp.87-97, Oct. 1992
- [3] 株式会社日本ユニテック, “改定版標準XML完全解説”, 技術評論社, 2001
- [4] 株式会社日本ユニテック, “改定版標準XML完全解説”, 技術評論社, pp.95-138, 2001
- [5] グスタフ・フォス, “日本の父へ”, 新潮社, 1977
- [6] グスタフ・フォス, “日本の父へ再び”, 新潮社, 1987
- [7] 大野邦夫, 西口美津子, “マトリックス方式による職歴情報の評価とキャリア設計の検討”, 情報処理学会研究報告, DD89-7, Feb. 2013
- [8] 大野邦夫, 西口美津子, “日本における女性起業家のスキルに関する一検討”, 情報処理学会研究報告, CLE12-2, Jan. 2014
- [9] グスタフ・フォス, “日本の父へ再び”, 新潮社, p.44, 1987
- [10] 大野邦夫, “複合文書の標準化経緯 - その登場からHTML5に至るまで -”, 画像電子学会誌, Vol.47, No.4, pp.488-491 (2018)